

8月10日、市民交流センターにおいて、甲府空襲時に現南アルプス市で教師をされていた高見澤静佳氏を講師に招き、「平和の尊さや命の大切さを考えるつどい」を開催しました。

## 「戦争は絶対にしてはいけない」体験者の叫び



「戦争は絶対だめ」と訴える高見澤さん

私は、大正13年12月11生まれの89歳です。  
 菲崎市から講演依頼のお話をいただき、私も喜んでお引き受けいたしました。

今は菲崎小学校のとなりに住んでおりますが、生まれたところは、南アルプス市の源村（現白根町）で、そこに住んでいたときに甲府空襲を体験しましたので、そのときの話をさせていただけます。

私が、当時小学校1年生のときに満州事変が起きて、そこで満州国が独立して、その後、小学校6年のときのシナ事変によって南京がなくなつて、提灯行列をしたことを子どもながらに覚えていきます。それから私が高校を卒業するときには大東亜戦争といつて、日本軍が特攻隊として真珠湾に飛行機のまま突っ込んでいって、それから小さな島々を日本軍が占領していき

結局、戦争をするたびに人々がみんな亡くなつていきました。

最後は、私が教員になって2年目のころ、ほとんどの男の人は兵隊に取られていきました。ちょうど教頭先生にも招集令状がきましたので、甲府駅まで見送りにいきました。当時は、今のように警備員がいまないので、男の先生は宿直、女の先生は日直というように対応していました。

私の実家は中巨摩の源小学校まで7、8分の距離でした。男の先生は教頭先生まで招集されていまして、宿直する人がいません。そこで、私と、2歳上の女の先生の二人で宿直をしようということになりました。7月6日のことですが、職員室は全て暗いカーテンを張つて、外に光が漏れないようにしていました。手元の灯りにも暗いカバーを掛けて、子どもの作文を見たり、テストを見たりして、二人で『明るいつていいね。』なんていいながら仕事をしていました。宿直ですから、手元に懐中電灯を持って30分おきに校舎の外を見回りました。

そのときに、そうですね・・・7時30分くらいですか

ね。私の住む源村の御勅川扇状地帯のずっと下の方に甲府の街が見えるのですが、北の東の隅に小さな灯りが見えました。『あの灯りが飛行機が来る目標になるとイヤだね』と二人で話しながら、職員室から宿直室へいって、ラジオを聞きながら重要書類をリュックサックに入れておくと、11時ごろ、突然ラジオから『警戒警報！警戒警報！』と聞こえてきました。そのとき、『これはもう・・・』と思い、慌ててリュックを背負つて外に出ました。すると『空襲警報！空襲警報！今、駿河湾を北上し、富士山を越えて山梨県の方へ飛行機がきます』と言つてる間もなく、飛行機の編隊がジャーときたかと思うと、10機くらいがすつと低空飛行になりました。とたんに飛行機から何かがパツと下に落ちました。それが、焼夷弾の束でした。パツと落ちるとバァーッと燃え上がりま

す。それが終わるとまた10機きて、落とします。そしてまた、10機と、全部で130機が襲来しました。甲府の街は火の粉が燃え上がり、まるで昼間のようになりまし

夕と身震いがしていました。近くに防空壕がありましたので、しばらく様子をみようと思いい、二人で防空壕の中に入ったけれども、それでも心配になってまた外に出て様子を眺めると、近所の人もみんな家の中に居られなくて学校の防空壕に逃げてきました。

朝の2時半まで、2時間半くらい甲府は火の海で真っ赤っかでした。そのうちに校長先生がきてくれたので、やっと肩の荷を降ろすことができました。『本当に生きたい心地がしなかつたです。』

130機ですよ！それが焼夷弾を落とし、本当に昼間よりももっと明るいです。

その後、焼夷弾を落とされた飛行機が学校の上を通過して帰っていきます。『もしまだ焼夷弾が残っていたら』と思うと、気が気ではなかつたです。いまでも、あの時の光景が浮かんでくると、ハッとしたり、時々夢に見たりもします。

あのとき甲府に焼夷弾が雨あられと降る中で、そこに住んでいる人たちがどんな思いだったかと思いを馳せました。のちに、そのときの様子が分かったのは、私の主人が甲府の武田神社の隣の63部隊に所属していたからでした。

そのとき、看護婦さんたちは担架を持って火の中に入っていく、焼け死んだ人、傷ついた人を神社の森に運んできたそうです。『なんて女の人は強いんだ。』と主人が関心して話してくれました。

また、次の日が大変だったそうです。主人は、荒川に横たわる死体や電信柱に吊りさがつて、プスプスと燃えている死体など、折り重なっている死体を運ばなければなりません。『何としてもこの人たちを葬ってやらなければ。』と、みんなで担架に乗せて伊勢町のお寺に何十回と運び、和尚さんにお経を読んでもらい供養したそうです。

私はあの火を見ながら、本当にいたたまれない思いでしたが、運んだ人々はもつと大変だったのではないかと思えます。私はこうして体験から、戦争というのは絶対にしてはいけないと、しみじみと感じています。

もうひとつ、戦争をしてはいけないという理由には、先ほど私が満州国の話をしました。この満州国に主人の姉の連れ合いが憲兵隊として赴任しました。家族もみんな一緒です。ところが、戦争が終わり、日本は負けてしまいましたので、連れ合いはシベリアに抑留されてしまいました。姉は3歳と5歳の子どもを連れて日本へ帰らなければなりません。

満州からその子どもたちを連れて帰るのに、どうやって連れて帰るのか。みんな日本へ帰りたい。女手ひとつで子どもを連れて行かなければ、野を越え、山を越え、ひょつとしたら3人も死んでしまいかもしれないと考えた時、お子守をしていた人に『この子どもたちを連れて帰ることができません。戦争が終わったら迎えにくるから、この子どもを預かってもらいたい。』と、自分の持っていたお金を置いて、自分は頭を坊主にして軍帽をかぶり、軍服を着て男の人の格好をして、命からがら日本に帰ってきました。

戦争が終わり義兄も5年間シベリアに抑留されたのちに帰ってきましたが、その後病気で死んでしまいました。

姉も、『ごつても生きながらえて、お金をかせいで、あの子たちを迎えに行きた

い』と一生懸命がんばっていました。『と一生懸命がんばっていました。』と一生懸命がんばっていました。国交が回復する前に亡くなってしまいました。主人はその話を聞いて、残留孤児の照会を厚生労働省に届け出ました。以来、毎年厚生労働省から通知がきます。子どもたちを育ててくれていた中国の方たちには、今でも本当に感謝しています。

### 葦崎市は、非核平和都市を宣言しています。

恒久平和は、人類共通の願望であり、葦崎市においても、日本国憲法に掲げられた恒久平和主義の理念を市民生活の中に生かすため、昭和58年3月19日、非核平和都市の宣言を行いました。

#### 宣言文：

真の恒久平和は、人類共通の願望である。しかるに、近年、世界において軍備の拡張は依然として続けられ、世界平和に深刻な脅威をもたらしていることは、全人類の等しく憂えるところである。

わが国は、世界唯一の核被爆国として、また平和憲法の精神からも、再びあの広島・長崎の惨禍を絶対に繰り返させてはならない。

わが葦崎市は、日本国憲法に掲げられた恒久平和主義の理念を市民生活の中に生かし、継承していくことが地方自治の基本条件の一つである。したがって、わが葦崎市は、非核三原則が完全に実施されることを願いつつ、核保有国に対し、核兵器の廃絶を訴えることをここに宣言する。